荒尾市立府本小学校　校長便り　No.78

みんなの居場所

裏面の話題

みんなの居場所の裏面は、小学生にとって必要ではないかと思う問題、漢字、諺、慣用句等々を載せていきます。ご家族の団らんの話題にしてみてください。会話が広がります。

令和8年2月24日(火)

雑感【語彙力向上】

子ども達の学力を客観視するに、最も必要性を感じるのは「語彙力」だ。学力の指標として「テスト」が利用されるが、そもそも問題文を読み題意を理解し解答するには国語の力が必要だ。読む力、理解する力、表現する力の3つの力である。国語の力はすべての学習の基盤にあるといっても過言ではない。そして、学習で身に付けたあらゆる資質・能力を活用して学習するのが「総合的な学習」にあたる。国語等の基礎・基本の力が身に付いていなければ、それを総合的に発揮することはできないとも言える。必然として、文章理解するための語彙力の必要性が高まるという訳だ。語彙力を高めるために何が必要か、私はこういう実践をしてきた。名付けて「国語辞典による読書の質的向上PROJECT」少しだけ内容の難しい本を選び、読み進めながら意味の解らない語句があればすぐに辞書で調べる。そういう読書を1日に10分間だけ毎日続けるのだ。これを積み重ねると、いつの間にか読書の質が上がる。これは語彙力が向上したことを意味しているのだ。この実践に愚直に取り組んだ多くの教え子達が、夢を叶え様々な職種で活躍している。

私の中学時代　校則

中学校に進むと、生徒手帳という身分証明書をもらいます。（今もあるのでしょうか？）私の手元には、中学時代の生徒手帳は残っていませんが高校時代の生徒手帳が残っています。改めて眺めてみると、まぁ凄い規則が並んでいました。半ば笑ってしまうものまで。中学時代の生徒手帳には「生徒規則」いわゆる校則が書いてあったのですが、その中で印象に残っているのは…、「外出時は保護者同伴とし、制服を着用すること」ですかねぇ。まず両親と外出する時は食事や親戚宅に行くときしかありませんでしたね。今考えると、本当に必要だったのかと思う規則ですが、今だからこそ校則は重要だと思います。

子ども達は「なぜ自由にできないのか？」「なぜ、規則があるのか？」と疑問に思う場面もあるのですが、私達は「まず、規則を守りなさい。」と指導します。それはなぜか？　中学校に行くと生徒会活動があり、その活動も小学校時代の児童会活動より充実してきます。例えば、学校全体に関わるような校則の問題についても、生徒総会等で話し合いを持ち、きちんとした手続きを踏めば改正することができます。校則は、先輩方が長い時間をかけて、中学校の自治的組織を目指した結果なのです。だからこそ守るべき大切なものです。それでも、時代にそぐわなくなったものについては、生徒が話し合いをして変えていけばいいのです。問題は校則に従おうともせず、より良い方向に向かおうとする自治的集団を、自分の「わがまま」や「自己中心的な考え」によって妨害しようとする者の存在です。子ども達は校則を守ることによって、社会性を学ぶチャンスなのです。そこまでしなくても…、と思えるくらい守らせることで、その大切さや不合理にも気が付いていくことになるのです。

私が校則を守れていたかどうか、それは置いといて、私は規則で縛られたという思い出はありません。与えられた枠の中で、存分に個性を発揮したような気がしています。どうしたら規則の範囲で背伸びできるか？　そんなことばかり考えていたような感じです。そこにも創意工夫がある訳ですよ。そんな工夫すら感じない子ども達もいますね。何度か、校則に関することで、体育教官室に呼ばれたこともありますけど、今では良い思い出です。

シリーズ「自分を語る」#78

この女の子は不規則な生活やストレスで、やはり歩くのはきつそうでした。でも、何度聞いても「絶対に歩く。」と言うのです。私達も車に乗せることは考えていませんでしたし、同じ班のメンバーが常に声掛けをしていました。「絶対に全員で歩き通そう！」って具合です。放っておいても完歩したのでしょうが、ナイトハイクは日が昇ってしまうと極端に体力を消耗しますので、この女の子を大人がサポートすることにしました。私と教え子が両脇を抱えて歩くようにしたのです。その甲斐あってか、何とか午前8時過ぎには伊倉小学校に全員到着しました。当時の熊本日日新聞の記事には、この時私達が両脇を抱えて歩いた女の子が写真に写っています。

この女の子は、既に成人しました。当時、6年生になってから、家庭の事情で引っ越してしまいましたが、同級生からの情報によると、元気にやっているとのこと。今でも、ナイトハイクのことが話題になるそうです。

さて、伊倉小学校における高学年担任、持ち上がりなるか？という所でしたが、学級が早期に落ち着いたということと、6年生と5年生は澤田の影響下にあるということなのでしょうか、私は持ち上がり担任をさせて頂く事となりました。6年生を担任させて頂くということは、年度末に卒業という節目を迎えることになります。分かっていてもほろ苦いものであり、だからこそ悔いの残らないようにしたいと思うものです。

そのクラスには、場面緘黙のあるお子さんがいました。ちなみに現在31歳、バリバリの現役保育士で、今では普通に私と会話ができます。結婚して子どもさんもいます。その子の卒業式に向けての取組エピソードです。

私は、その子の「肉声」を卒業式の取組を行うまで聞いたことがありませんでした。私の意識の中に「病気だから仕方がない。」という気持ちがあり、何もしなかったのかもしれません。そのような中、6年生の3学期、卒業式の練習が始まりました。学校では全く声を発することが無いということは、保護者の方も知っていましたし、家庭では問題なく話すということも聞いていました。そこで私はお父さんにこう聞いてみました。

「卒業式はどうなりますかねぇ？」お父さんはこう仰いました。

「卒業式ではきちんと返事もさせますし、呼びかけもさせます。」

半信半疑でした。それまで、担任、管理職、養護教諭等で何度も話し合いを持ち、それでも改善されなかったのですから。その時の養護教諭は、無理して声を発するようなことは本人にとって苦痛以外の何物でもないとの見解でしたし、他の職員も「場面緘黙」というレッテルに、本当に必要なことを見失っていたのかもしれません。

ある日、お父さんから連絡がありました。

「先生、次の卒業式の練習の時刻を教えてください。俺が行きます。」

父親としての責任と愛情に裏付けられた荒療治開始です。　（つづく）

※　「みんなの居場所」に関するご意見ご感想をお寄せください。（「みんなの居場所」への掲載の　可　・　不可　）